7　美術

(1) 教科の目標

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的能力を伸ばし、豊かな情操を養う。

(2) 指導の目標

ア　平成 22 年度

・１学年　①創造活動による自己表現の楽しさを実感させる。
②基礎的基本的技法・技能の習得と用具・道具の扱い方を徹底する。
③作品から作者の心情や意図、表現の工夫やよさを感じ取らせる。

・２学年　①創造活動による自己表現の楽しさを実感させる。
②立体的にものを見る力、とらえる力を身に付け、表現に生かさせる。
③作品から作者の心情や意図、表現の工夫やよさを感じ取らせる。
④日本の伝統文化に触れさせ、興味・関心をもたせる。

・３学年　①創造活動の楽しさを実感させ、よりよい思い出を作品に残させる。
②鑑賞における体験を言語活動を通し、表現させる。
③美術作品のよさや美しさに感動できる豊かな心を育てる。
④日本の伝統文化を理解し、自己の制作活動に生かさせる。

イ　平成 23 年度

・１学年　①創造活動による自己表現の楽しさを実感させる。
②基礎的基本的技法・技能の習得と用具・道具の扱い方を徹底する。
③作品から作者の心情や意図、表現の工夫やよさを感じ取らせる。
④日本の伝統文化に触れさせ、興味・関心をもたせる。

・２学年　①創造活動による自己表現の楽しさを実感させる。
②立体的にものを見る力、とらえる力を身に付け、表現に生かさせる。
③作品から作者の心情や意図、表現の工夫やよさを感じ取らせる。
④日本の伝統文化に触れさせ、興味・関心をもたせる。

・３学年　①創造活動の楽しさを実感させ、よりよい思い出を作品に残させる。
②鑑賞における体験を言語活動を通し、表現させる。
③日本の伝統文化に理解し、自身の制作活動に生かさせる。
④共同で作品を完成させる喜びを感じさせるとともに、美術のもつモニュメント性を理解させる。

(3)　指導の重点

ア　平成 22 年度

・絵画、彫刻とデザイン、工芸を複合的に学習できる題材を用意する。
・全学年で取り組む題材を用意し、互いが鑑賞し合える状況を作る。

イ　平成 23 年度

・絵画、彫刻とデザイン、工芸を複合的に学習できる題材を与えることで、美術の活動を広くまた身近なものとしてとらえ、創造活動の喜びを味わわせる。

・全学年で取り組む題材を用意し、互いが鑑賞し合える状況を作り、口頭での発表やレポート等の言語活動を通し、互いの美意識を高め合わせる。

(4)　授業改善に向けての具体的な取り組み

ア　平成 22 年度

・具体的な進度計画を指し示し、生徒の毎時間ごとの目標を明確にさせる。
・机間巡視による、個別指導に重点を置く。
・適宜、放課後の美術室開放等で生徒の進度を合わせられるよう工夫する。

イ　平成 23 年度

・具体的な進度計画を指し示し、生徒の毎時間ごとの目標を明確にさせる。
・生徒個々にも進度表を用い、毎時間の反省と次の時間への課題、計画を立てさせ、取り組みへの意識を高める。
・作品サンプルを多数用意し、特に発想、構想の苦手な生徒にとって、速やかに制作に取り組めるよう、支援する。
・個々の進度差に対応できるよう、きめ細やかな机間指導を行う。

(5)　平成 22 年度　授業評価から授業改善へ

ア　前年度の授業評価の結果からの課題

単純に授業評価の数値だけで見るならば、授業の仕方において、「①あてはまる」が「②ややあてはまる」の数値を上回っている。今後も、より①の数値が大きくなり、「③あまりあてはまらない」の数値が少なくなるように努める。

イ　今年度の授業評価の結果分析と課題

「授業の受け方」の「チャイム着席ができているか」の問いで生徒が低い数値を出したのは、あるクラスがプールの授業後でチャイム着席ができなかったことを指導した後のアンケートとなったためである。２、３年生では体育の授業後も、ほぼ遅れずに来ているので今後も指導を続けるとともに、保健体育科とも連携し改善を図る。

同じく「授業の受け方」の「発言・質問」の問いについて、「①あてはまる」が３３％、「②ややあてはまる」が５０％と①が②を下回る結果となった。作業に入ると個々の生徒に対する指導時間が多く取られ、質問待ちの時間が長くなってしまうことが影響していると思われる。

「授業の仕方」の「進む速さは適切か」の問いに対して、「やや」も含めて速いと感じている生徒が１４％と多いが、今後さらにペースアップを図るのでその上での対策が必要である。

ウ　授業改善の手だて

発言や質問をしやすくする上で、机間指導の中でできるだけ多くの生徒に声かけをし、個々の生徒に対する個別指導をしていく。また指導に時間がかかる場合も、できるだけ他の質問等にも答えながら、いつでも質問を出しやすい雰囲気をつくる。

「授業の進度」については、進度表を活用し、作品完成予定日や提出日を明確にしておくとともに、プリントや期末テストを有効に活用し、発案などの時間のかかる作業の効率を上げていく。また個々には、机間指導等で有効な時間の使い方を促す。

評価の低い生徒への具体的な手だてとして、美術においては、昼休みや放課後の時間等を活用し、完成ま

で導くことでその達成感や充実感を味わわせ、今後の課題に対して意欲を高められるように支援していく。

発案の部分で作業に取り組めずにいる場合も多く見られるが、具体的な例となる作品を多く取り入れ、塗り絵やモノマネ的な段階でもよいので早く作業に取り組めるようにすることで、意欲の促進につなげていく。

(6)　平成 23 年度　授業評価から授業改善へ

ア　前年度の授業評価の結果からの課題

前年度、1 学年のこのアンケートを行った時点では、技術を身に付けさせる取り組みの授業が中心で、プリント等を使った説明なども多かったため、比較的、説明や板書・プリントの項目でよいポイントが上がっていた。しかし、現２年生においては７月までは作業中心の授業であり、まして発案の部分については１年次の期末テストや春休みの宿題によるところが多く、生徒は黙々と制作に取り組んでいる状況だったために、授業の仕方については答えにくい部分が多かったと思われる。次回より、質問項目をより適切な答えやすいものにする必要性を感じた。

その中でも、授業の到達目標に関しては前年度、今年度とも比較的高いポイントを上げていたが、進度表で毎時間の目標を生徒自身が確認できるシステムにしていたためであると思われる。これは今後も継続させていきたい。

イ　今年度の授業評価の結果分析と課題

・２学年　チャイム着席や忘れ物をしないなどについては、昨年同様に高い数値となり、実際、生徒の多くがまじめに授業に取り組んでいる。「発言・質問をしたか」の項目については、昨年度より低い数値となってしまった。しかし、学習の進度が制作段階の時間においては、学習が個人内部の活動となり当然の数値変化であるともと言える。

また、否定的な意見の中には、こちらの意図があまり伝わっていないという生徒もいるので、机間指導の際にできるだけ個々の生徒への声かけを増やすようにする。鑑賞の授業になれば、「発言・質問」も増えるはずである。

アンケートの質問項目については、美術科としての教科の特徴を踏まえた質問項目となるよう検討･改善を進めていく。

ウ　授業改善の手だて

美術の苦手な生徒にとって、作品づくりの上で一番ネックとなる発案の部分については、導入の段階で発言や質問の行いやすい状況になるよう努める。そして、生徒からの声を積極的に引き出させることで、生徒が意欲をもって作品づくりに取り組めるようにする。

その結果、作業の遅れがちな生徒もスタートラインを揃えて制作にあたることができ、作業上の指導も十分に行えるといった好循環となることを期待している。今後は、導入を円滑に行うことができるよう教材研究と準備を行う。

(7)　平成 22 年度　研究の成果と課題

ア　「授業評価」について

・１学年　多くの生徒が、図工から美術への変更を新鮮に受け止め、意欲的に集中して授業に取り組めていた。作業段階での点検指導に時間を取られ、個々の質問にタイムリーに答えられない場面があった。また、進度については、少し速いと感じている生徒が一割強いる中で、さらにペースアップを図っていくための対策が必要である。

・２学年　３学年同様、前年度との違いに戸惑う生徒も見られたが、３年生よりは早く授業の態勢に慣れ、集中して授業に取り組めた。ほぼ全員がまじめに作業に当たっているので、生徒が、より意欲的に高いレベルを求められるような指導を行うことが必要である。

・３学年　前任の教諭とは指導方法が異なる点も多かったようで、夏休み前までは生徒に戸惑いも感じられた。夏休み以降は、ほとんどの生徒が今年度からの授業の取組に慣れてきたせいか、落ち着いて課題に向かえるようになった。しかし、なかなか授業に取り組めずにいる生徒に対して、個別指導まではうまく行えなかった点もあり、それらの生徒に対して、時間を有効に使わせていくことが今後の課題である。

イ　今後の課題

・１学年　①個々の質問にタイムリーに答えられるようにするために、３年生と同様に課題を進度に照らして細分化する。毎時間、個人の進度差(レベル)に応じて留意点を明確に示すことで、個々の取組についての目標を分かりやすくさせる。併せて、机間指導の折にも、先に質問事項を確認し、同じような質問のある生徒を集めて指導を行うなど、生徒の疑問点に対して、きめ細やかな指導を行う上での効率化を図る。

②さらなる授業のペースアップを図る上で、毎時間の目標設定をしっかりとさせることが効果的であるので、進度表を有効に活用する。また、進度表の記入項目の改善を図り、時間ごとに達成感、成就感が得られるようにし、授業に無理なく集中できるようにする。

③現段階でも意欲的に取り組めているので、互いの作品の鑑賞や発表を通して、言語活動の充実を図り、さらなる意欲を喚起できるようにする。

・２学年　①生徒が、より意欲的に高いレベルを求められるようにするために、課題ごとに、鑑賞を中心に具体例の提示を行うとともに、感じた事の発表など言語活動を取り入れ、生徒に興味関心をもたせ、意欲を高めさせる。

②課題を進度に照らして細分化し、その都度、各時間での目標を明確(進度表の活用)にさせ、達成できるように努力させる。